

講演

阿部志郎 先生

静岡には些かの縁があります。

私の先祖は安倍川の丸子の出身でして、慶長年間ですが、青森に津軽藩という藩ができました時に、都落ちをして士官をしました。殿様から安倍川から来たから阿部を名乗れと言われ阿部という姓になりました。いつの間にか「こざとへん」の阿部に変わりました。実をいうと私が十四代目なのですが、私の両親は、次男で分家しましたので先祖の青森の墓には入れませんが、富士霊園に葬られております。孫の家族が富士市におります。

長泉に米山梅吉記念館っていうのがあります。米山梅吉というのは日本のロータリークラブを作った人でありましてロータリアンが立派な記念館を長泉に建てました。この人はアメリカから信託業務を導入して初めての三井信託という会社を興して社長となりました。その後、三井各社を窮乏して三井報恩会という支援会という支援団体ができまして、その初代理事長を致しました。その支援財団は戦前戦後を通し一番大きな財団でして600億の基金を持っておりました。600億というのは当時のサラリーマンの月収が60円〜70円という時代の金です。

報恩会にいろんな仕事をしましたけども、その一つがハンセン病でありました。全国に十三の国立療養所とキリスト教が三つくらいでありました。それを歴訪致しました。ご存じないかもしれませんが、けれども、ハンセン病の療養というのは地の果てにあるのです。例えば島、週に2回しか船が通らないというそういう所ほど、手弁当を持って、手土産を持って回っておりました。

三井を辞めてから退職金で母校の青山学院に小学校と幼稚園を作

りました。

米山が小学校長、奥さんの春子が幼稚園長であります。その教職員の給与を払うために書画骨董を売り払いました。息子さんの桂三さんは慶応の教授をなさった方ですけれども、息子さんの話によると、母親が質屋通いをして、全部吐き出したのであります。私は、その米山を子どもの頃から知っておりまして憧れました。米山のよいうな実業家になりたいと夢を抱いて経済を勉強したのですが、心変わりしました。それは、それは米山が支援した御殿場駒門の神山復生病院というハンセン病の病院で井深八重という一人の看護婦さんに出会ったからなのです。それによって私は福祉の道を選びました。この静岡は私の人生を180度回転させたという思い出の地でもあります。大変親しい思いを持って参りました。

今回は、増田さん、三条さんから作業所学会にお招きをいただいたのです。作業所学会って聞いたこともないですねえ。おそらく、この学会は全国でここが唯一ですよ。是非大事にして欲しいと思いますが、丁重なお招きを頂いたうえに、遠藤さんが切符の手配を全てしていただきましたので、今朝7時に出てここへ時間どおり来ることができました。その心遣いに感激するとともに、喜んでここにまいりました。

子どもたちに、こういう話をしました。

友だちが遊びに来て二人で遊んでいて3時になって、お母さんはおやつのお配をする。戸棚を開けても、お菓子が無い。缶からの底にやっと一枚、お煎餅を見つけたのです。その一枚のお煎餅をプレゼントしたのです。

「君たち困るだろ。友だちと二人いるのに、お煎餅たった一枚しかない。どうする？」。

「簡単だよ。このお煎餅をね、手で割って二つにして分ければいいだろ」

「これを『半分っこ』っていうのだよ」。

「半分っこすればいいんだよ」。

「でもね、大きい方が欲しいだろ。みんな大きい方を自分でとって、小さいのを友だちにやるでしょ。それをね、我慢して大きいのを友だちにやってごらん、友だち喜ぶよ。友だちが喜んでくれたら君もうれしいだろ。半分っこしようね」。

そう言っただけで子どもに教える私は、半分っこできないのですよ。未だに。もう今、妻はおりませんけれども、妻とはいつも、饅頭もバナナも半分っこしてきました。無意識ですけど私も私が、やはり大きい方をいつも取っているのですよ。いやあくだめですね。半分っこできる人がいるのです。いつも半分っこするのは。大きい方を出す人がいます。

インドにこう言う民話があります。馬が二頭いる。形も姿も同じ。大きさも同じ。見分けがつかない。母と子。どうやって親子の区別をつけるか。二頭の間に餌を置きなさい。餌を先に食べるのが仔馬、母馬は決して先に食べない。これが私たちの母親ですよ。母親というのは、必ず子どもに大きい方を出してくれるのですね。父親はどうですか。父親もしようがない、大きい方を出しますよ。でも、一瞬躊躇するのはいいのです。金が有り余るほど、たくさん持っているれば、持っている程、今問題になっているでしょ、一流企業の社長さんが何十億か脱税をした。どんなにたくさん持っていて、持っているれば持っている程抱え込んで渡したくないものなのでしょうね。それが人間ですよ。そういう中で、福祉の世界で働くというのは、いったいどういうことなのでしょう。

皆さん、加藤一二三という名前を、よくご存じでしょう。将棋の名人。無名でした。少なくとも私にとっては。加藤一二三が藤井少年と対局したのです。十四歳の中学生に名人が負けたのです。悔しいですね。もう一回やれば、必ず勝つと言いたいところでしょう。ところが、加藤一二三はニコニコしながら、「この子には才能がある。将来の日本の将棋を立っていく」。

広いでしょう。褒める。これで加藤一二三の株が一遍に上がったのですね。加藤一二三と、ある経済学者との対談をテレビで見ました。

「加藤君あなたは、昼飯は必ず鰻重をとっていますね」。

「そうです」。

「そんなに、鰻がお好きですか」。

「いや、好きじゃない」。

「好きじゃないなら、何でとるのですか。好きな物は何なのですか？」。

「天ぷらうどん」。

「何で天ぷらうどんをとらないのですか？」。

「天ぷらうどんはね、注文して遅れてきた。鰻は定刻にちゃんと用意された。それから、天ぷらうどんはとらない」。

「どれくらい遅れたのですか？」。

「2分」。

7時間、9時間という持ち時間の中で、2分なんて一瞬なのに、一二三にとって非常に大事な2分なのです。いわば、将棋のプロというのは、自分の人生を懸けるのですよ。これがアイデンティティです。

三國連太郎という有名な俳優がいました。三國に老け役が回ってきたのが三十歳。三國は歯を全部抜いたので。横溝正史という推理小説の作家がいますね。横溝は夜に小説を書く、書きながら背中がゾクゾクしてきて居ても立ってもいられない。家族のいる茶の間に入って行くところを書いている。小説の主人公と書き手が一体になる。同化している。これをアイデンティティというのです。加藤一二三というのは、対局をしている時、時々相手側に回って立って棋盤をみるのです。こんなことをするプロはいないそうです。でも、彼は時々立って相手の後ろに回ってみる。相手の立場から見るとですね。

世阿弥が「離見の見」って言いました。「離見」って離れて見る。

離見の見。能役者が舞台で一生懸命に踊る。でも、心は観衆の一人に置いて言うのです。自分が熱中する踊りに。しかし、自分を客観的に見なさい。これを「目前心後」と言います。目の前のことに集中する。しかし、心は後ろに置いてという教え。アイデンティティとは、近づいて一緒にやりなさいって言っているのです。離見というのは離れて見ることですよ。

日露戦争の時、日本艦隊を率いた東郷元帥が三笠艦に乗っておりました。その時の参謀長が秋山真之でした。東郷元帥以下は双眼鏡で別艦は見るのです。秋山はただ一人双眼鏡を持っていませんでした。秋山は、確かに双眼鏡はよく見える、しかし、わしは大局見ると申しました。日露戦争に勝ったのは、秋山の戦略なのです。この秋山は目の前ではなしに大局を見続けたのです。離れて見る。近づいて・・・矛盾しているのです。この矛盾の均衡の上に私どもの主体性が築かれます。2001年9月11日のアメリカの同時多発テロ。崩れていく高いビルから非常階段を伝わって人々が雪崩のように駆け下ります。その流れに抗するかのように7名の消防士が上がって行ったのがテレビに映りました。殉職した消防士が37名います。その37名の消防士のためにアメリカでは100か所以上記念碑が作られます。日本で慰霊碑を作るのは出身地か殉職した場所です。でも見ず知らずの人に建てるとしても、アメリカは100か所以上です。その英雄的行為を後に残そうということで、建てられております。

東北の災害の時、一人のワーカーが老人を車椅子に乗せて逃げました。逃げている途中、津波がだんだん迫ってくる。もう逃げられない。ワーカーは拝むようにして、老人をそこに置いて一人で逃げたのです。誰も責められない。この女性ワーカーに3人のお子さんがある。ところが、今そのワーカーは心の病です。良いか悪いかではないのです。そこに主体的な決断をしたかどうかということが問われるのだと思います。

私は戦争の時、軍隊で過ごしておりました。いくつかの経験をし

ました。戦地には行ったことがありません。内地だけです。甲府の部隊に行く時に、空襲で逃げ回りました。怖かったです。今思っても怖い。焼夷弾がバラバラって目の前に落ちていくのです。その時は夢中ですから怖いなんて思いませんでした。

気が付いた時には軍服を着ていまして、これはいかんと思いついて、焼けていく家の中から家具を取り出す手伝いをしました。そして、出張命令が出ておりました。一人で甲府から岡山へ赴任をしなければなりません。昼に、やっと汽車が出まして東京経由で姫路へ行きました。遅い汽車ですので、二晩、握り飯二つだけで過ごして、やっと岡山の勝間田という所に行きました。ところが、姫路から汽車でなくて貨物列車に乗せてもらって向かいの石炭の所へぼつんと一人乗りしました。ところが、山陰ですからトンネルに次ぐトンネル。蒸気機関ですから真っ黒。井戸で体を洗って部隊に行きました。空腹です。ところが、肝心の部隊に食べる物が無いのです。米が無いのです。あつたのは馬の飼料です。人間が食べる物ではないのです。それを少々と、おかずは塩ゆでのニラだけ。あと無いのです。朝、昼、晩。私は十日いました。十日間。初めて飢餓、飢えを私は体験をしました。戦友が捕まえてきた蛇も食べましたが、でも飢えていました。日本でたくさんさんの戦死者を出しましたが、その多くは戦って死んだのではなくて餓死したのです。戦争というのは実に悲惨であります。

この戦争の体験を私は語りませんでした。語りたくないし、語っても若い人にわかるはずがないと思いついておりました。一年前、北朝鮮でミサイルが次から次に上がりました。そして、ミサイル運搬する巨大な車の後に軍隊が行進しています。あの北朝鮮の軍隊の行進はナチドイツの行進のスタイルに継がれるのです。

その兵隊は無表情です。私は重なりました。世界各地にテロが起こっています。爆弾抱えて自爆してたくさんさんの人の死傷者を出す。何でああやって命を散らすのかと思えますけれども、ハッと我に返りました。

私が軍隊で受けた訓練は何か。蝟壺を掘って隠れて敵の戦車が来ると爆弾を持つて体当たりするのです。それは私の姿でした。命令に従う。そのことだけです。情けないですね。何が情けないか。命令に従って行動したことではないのです。そうではなくて、それを考えず、悩まず、疑わず、恐れをもしたのです。そのことが、恥ずかしいですね。今考えると…。

なんて愚かだったかと思うのです。今、これから若い人には、事に当たって考えて、悩んで、疑って、進んでほしいと、願いを込めて今、戦争体験を語るようになりました。

私に何が欠けていたか。「知恵です」。

フーテンの寅さんが、甥に諭した言葉があるのですね。

「俺のように、勉強しない者は、事に当たってサイの目で決める。サイコロだ。勉強した奴は、考えて物事の筋道をつける。お前は勉強しろ！」。

知恵というのは知識ではありません。知識というのは学べば学ぶほど膨らんでいきます。でも、知識は多くなればなるほど、それを囲む無知の世界が広がるのですよ、知らない。無知の知を知る理性を知性と申します。

もう一つ欠けていたのは、感性です。

早稲田大学を作りました大隈重信が明治22年に暴漢に襲われて負傷しまして、片足を失って自宅療養しました。それを治療したのが軍医総監。一番トップにいた軍医、高木兼寛という人です。この高木兼寛が慈恵大学を作りました。そして、看護教育所を明治18年に作りました。これが最初の日本の看護教育です。その看護教育所から4人の看護学生が大隈の家に在宅、看護のために使わされました。その4人の看護を見て、大隈夫人の綾子は感謝状を書いたのです。その中に

「姿なきを見、声なきを聴く」。

こう書いてありました。最大の賞賛です。姿なきを見、声なきを聴く。目に見えるニードではなく、ニードの背後に隠されている物

を見抜く。これが感性です。

子どもに

「氷が溶けたらどうなる？」。

「水になる」。

「正解！」。

雪の北国の子どもの中には

「氷が溶けたらどうなる？」。

「春が来る」。

と答える子どもがいるのです。

バツです。しかし、なんと豊かなことなのか。私は若い時、障害児の保育をいたしました。学童保育で健康な子と障害を持つ子と一緒にしました。その中に知的障害、行動障害、言語障害の女の子がある日行方不明になった。家から家出したのです。歩くのも容易でないのですよ。でも、家出した。学童保育と親たちが集まって皆で探した。見つからない。1時間半後に千葉の駅から保護したという連絡がありました。子どもはホツとした。

「助かったか！」。

そして、何故もっと監督しないのか。ちゃんと見守ってくださいよ、と心で願っているのですよ。大人は…。

翌朝、仲間の学童保育の仲間はその話をすると何と言ったかというところ

「わあくすげえくなあお前。一人で行ったのかよ」。

「僕も一人で電車に乗って行きたい」。

憧れなのです。子どもの…。この「すげえくなあ」という子どもの感性を、それを子ども大人は持っていないのです。大人は監督することしか、上からの目線で見るといって、その姿勢が大人を支配しているのではないのでしょうか。

そこへもう一人、ヒロシという男の子がおりまして、5歳で来た時は歩けません。行動障害、知能障害、言語障害、その子がやっと歩いてジャンブルジムに上った嬉しさを今でも忘れません。

この子が二十歳になりました。横須賀の成人式に招かれまして、1200人の新成人たちがそこに招かれました。荒れている時代でありまして、ザワザワ、ザワザワして市長や市会議長の挨拶に誰も耳を傾けない。ここでオーケストラの演奏がありました、抽選でそのオーケストラを1分間だけ指揮する抽選がありました。ヒロシが当たったのです。

そうするとヒロシがボランテニアに連れられて指揮台にやってくるのです。その恰好を見て、皆あざ笑いました。指揮台に立った。見事に指揮したのです。ヒロシのお母さんは音楽家。ヒロシは毎日家に帰るとMDでクラシックだけ聴いているのです。頭に入っているのですね。流暢な指揮をしたのです。驚いたのはオーケストラの団員たち。終わった途端、オーケストラが立ち上がって拍手をした。そしたらつられて会場の成人たちも拍手をした。指揮をしている間、会場はシーンとして、皆がそのヒロシを見つめていた。荒れている若者1200人を前にして私は講演などできません。でも、障害児のヒロシが、人々の心を一つにまとめた。立派な教育者ですよ。この障害をもっている人を尊敬するという人間的な態度をとりうるかどうか、これが大きな課題だと思います。

さて、私たちは命を大事にしてきました。でも、はたして私たちの歴史は命を大事にしたと言えるのか。伊豆の大島の波浮の近くに、俗称ですけれども「婆転がし爺流し」という地名が残っています。姥捨です。姨捨の伝説というのは、全国600か所位あるのです。本当に年寄りが役に立たなくて捨てられたかわかりません。私は、その前に自分で身を絶ったと思っております。今も自殺者の35%は年寄りです。この自殺は米国の3倍、イタリアの4倍あるのです。私は障害者にとって、大きな壁は2つあると思うのです。

一つは、明治7年に始まる日本の政策である富国強兵、殖産興業です。強い兵隊で国を守って国を豊かにしよう。そこにおける価値基準は強い人間か弱い人間かを分けることです。徴兵制を布きました。徴兵に体悪くて不合格になれば、軍隊に行かなくていい。でも

世間はその人に仕事を与えませんでした。第一次世界大戦で、米国の兵隊たちがヨーロッパから負傷して帰ったとき、その負傷兵のためにはリハビリテーションが始まりました。負傷した体を補完して社会に戻す。指の無い兵隊のためにライターが発明されたのです。リハビリテーションから・・・。

この時日本はどうだったか。廃兵です。軍人も戦闘力を失うと廃兵として捨てたのです。こうした世の中もようやく第二次大戦後にリハビリテーションを受け入れて、見事に発展をしました。でも、リハビリテーションの本質というのは、機能を保全することではありません。リハビリタスというのは人間性の回復をいうのです。人間そのもの、ここには家庭があり、職業があり、経済があり、地域がある。それを全部包括した人間そのものを回復させる。それがリハビリテーションだという意味がまだ十分理解されていないと思います。

戦前、知的障害児を「白痴、痴愚、魯鈍」と言いました。痴は痴呆の痴、知恵遅れは、鈍くて愚かだと決めつけた。それが私どもの歴史であります。

もう一つ大きな壁は、
「身体髪膚、之を父母に受く。敢えて毀傷せざるは、孝の始め也」
昔から教えられてまいりました。毀傷する、体が傷つく、障害を持つ、それは、最大の親不孝。障害を持つこと自体が不幸。命を大事にしなかったのは戦争です。私は、士官の教育を受けたのです。教えられた一つは、

「兵隊は、紙切れ一枚、赤紙という召集令状で何人でも集められる。馬は買わなければならぬ。軍馬を大事にしろ」。

戦争の時の日本の掲げた標語は「一億玉砕、国体護持」という言葉です。一億人、国民全部アメリカと戦って死ぬ、国体が残ればいい。つまり天皇制です。人間は道具であり消耗品でありました。

高度経済成長期、私のいる横須賀の街に教育問題が起りました。中学生が弁当を持ってくる。箸をつけてこない生徒が現れた。教師

は、

「箸持って来い」。

「俺、箸なくても食えるよ」。

その生徒は弁当箱にかぶりついて食べます。まるで、動物が食べるように食べますので、これを教師たちが「犬食い」と申しました。公立中学25校がありますけれども、全部に広がっていたのです。パンというのは生きる手段です。犬食いというのはその手段であるべきパンが目的化することです。目的化するということは、生きる意義を失うということであります。それが今日の私たちの問題なのではないのでしょうか。生きる意味を知る。なぜ自分は存在しているのか。何をしなければいけないのか。明日どうなるか。生きる意味を探していく。

昔の人は、日の出、夕焼けを見て拝んだのです。西方浄土を思ったのです。私の子ども頃の親の叱り言葉は、

「お天道様が見ているよ」。

人が見てなくてもお天道様が見ている。人を超えた高みから社会を見、人間を見る手を昔の人は持っていました。今はどうでしょう。先月、私の街にポケモンが来ました。何百人の人がひたすらスマホを覗きながら、歩いているのですね。誰が前にいるか、問題にならない。ぶつかる。何人か喧嘩が起こるのですよ。ただだけ見ているから、上を仰ぐことを忘れたということが私どもではないのでしょうか。

鎮守の森というのは、神奈川県に2800あったのです。2800あった鎮守の森が40年前の調査で規格に合う鎮守の森が41しか見つからないのですよ。鎮守の森というのは無駄な空間です。収益を生まないのです。それを壊して、工場を立て、住宅に変え、駐車場にする。生産性が上がりました。でも、何か貴重なものを失ったのではないかとこの私どもの思いが今日あります。

こうした中で、福祉の世界では、対象者、利用者を守るために施設を作ってきました。ことごとく反対されました。東京では、施設

ではないのに、児童相談所の反対運動が起こっているのですよ。施設はどうしたのか。高い塀を張った。石礫が飛んできても守れる様ように壁を作ったのです。そして内に籠ったのです。いつの間にか施設が受け身になってまいりました。こうしたところで政府は施設に社会貢献をしろというのですね。何するのかわ戸惑っています。社会的養護、その中で施設がどのような役割を果たしたかということ、ほとんど無視されていました。心障法改正、介護保険法改正、今や転換期です。そして在宅サービスが強調されているのです。大きな、巨大化していく施設ではなしに、在宅のサービスなのです。皆さんはそのモデルですよ。このモデルを皆さんがこれからどう活かしていくかということが問われているのです。転換期です。どう転換をしていくか。

そこで社会福祉基礎構造改革になりました、社会福祉法という新しい法律ができました。七つのアジェンダがありまして、その一番先に掲げたのが「人間の尊厳」です。初めて使った言葉です。戦後、人権という言葉が流行りました。権利というのは、自分の権利、他人の権利と相対的なのです。しかし、人権という言葉の意味は「人格の尊厳」を指しているのです。何故人間は尊厳性を持つのか。WHOが健康の定義を作っています。健康とは、身体的、精神的、社会的に健全な状態をいうということです。単なる病気をしていないことではないということ定義しました。それにもう一言加えたという提案を各政府に出しました。日本政府も受けました。つまりスピリチュアル。スピリチュアルという言葉をつけたい。日本政府は困惑したのです。スピリチュアルという概念が日本にないのです。スピリチュアルという言葉を使わないのです。なので、いまだに政府はスピリチュアルという言葉を使っておりません。

スピリットこれが人間の本質を指す言葉なのです。スピリットというのは、聖書によりますと、神が人間を創造した。その作られた人間に神が人間の鼻から命の息を吹き込む。そして、スピリチュアルな存在になる。こういう解釈になります。それによって人間は生

けるものとされるからです。生けるもの、どんな人も、真実に人間たらしめる。それがスピリットでしょう。障害を持つがもつまいが、生けるものとされる、生けるものにする。

ヘレンケラーという人がいました。世界の聖女と呼ばれた女性で、目が見えない、耳が聞こえない、口がきけない、三重苦です。戦後日本にも来ました。ヘレンケラーはこう言ったのですよ。「意味の無い者に、新しい意味を生み出す」。こう言ったのです。それが福祉ではないですか。世間から意味が無い、軽んじていられている。その人の真実意味を作っているからこそ、そこには人格と人格、出会いがなければならぬのです。

聖書に一人より二人の方が良いと書いてあるのです。二人いれば一人が倒れた時に助け起こすことができますからです。お互いに助け合う。北欧のデンマークという国があります。第二次大戦で日本が米軍に敗れて米軍の占領下に置かれたように、デンマークはドイツと戦って敗れました。ドイツ軍の占領下に置かれた。ドイツ軍は600万に及ぶユダヤ人を虐殺したという有名な話がありますが、あるとき国民にメールを出しました。何月何日の朝何時からデンマークに在留するユダヤ人は胸に赤い印をつける。所定の印をつけました。印をつけずに外出した者は即刻逮捕する。その命令が実施される日の朝早くデンマークの王様が一人で馬に乗って街を散歩していました。コペンハーゲンの市民たちが馬上の王様を見上げると、なんとデンマーク人の王様の胸に真っ赤な印がついていました。誰言うともなしに次から次へと皆赤い印を身に帯びた。さすがのドイツ占領軍もこれには手を出せませんでした。ドイツが占領した国で、ユダヤ人が保護された国はデンマークただ一国。この故事に習って、日本で児童に関する国際会議が開かれた時に、その赤いシンボルマークを作ったのです。レッドリボンと称しました。レッドリボンというのは連帯の印です。連帯とはお互い仲良くしようという意味ではないのです。連帯とは、人間の体、手のように動く部分、盲腸のように無くてもいいのではないかという隠れた部分、そのすべ

での機関が、しっかりと組み合わせられて一つの体として機能する。人間社会は体と同じではないか。一つ一つの機関が、お互いに支えあって社会を作るべきだ。その意志と努力を連帯という言葉で表すのです。

三和銀行に、頭取をした川勝堅二という人がいました。ロンドン支店長の時に財界人がよく集まってパーティーをするのです。そうすると奥さん方で話の輪ができる。川勝夫人がそこに入ってくる。そうすると話題がボランテティアになる。川勝夫人がボランテティアをしてないので恥ずかしくて、まもなくボランテティア活動を始めます。夫の堅二さんも「それはいいのですよ。でも、私まで連れてかれましてね」と笑っていました。かつて、私どもの社会ではボランテティアをするとお節介、でしゃばり、陰口を叩かれたのです。ボランテティアをすることは恥ずかしくなかった。でも英国では、ボランテティアをしないのが恥ずかしいと言わしめる社会を作っているのです。そこから福祉国家が生まれるのです。そこで私どもは戦後、社会保障制度を作りました。

そのモデルは英国のベバリッジ法案。ベバリッジが国民の要望に応じて空襲下に国民の命と生活を守り、社会保障法を作ったのです。これを実施したのはアトリー内閣。クレメント・アトリー、ウイリアム・ベバリッジです。二人ともロンドンのスラムのボランテティアをしてきたのです。社会保障というのは、そのスラムの貧困を何とか無くそう、犯罪を撲滅しよう。そういう動機で作られたのが社会保障であります。

エリザベス女王が戴冠して七十一年の折、日本からは今の天皇が、皇太子の時に参列をした。国民が大騒ぎをしたその翌日、エリザベスはどうしたかというロンドンのスラムに行っています。女王になつた喜びを、社会で一番苦しんでいる人と分かち合いたい。そのことを森恭三という有名なジャーナリストが東京に打電しました。日本のメディアは無視、報道しませんでした。ここが大きな違いです。私どもはベバリッジが作った社会保障制度を学んだのです。

そして、日本にシステムを作り、今は世界に誇る社会保障制度ができていますね。立派なものです。でも、どうでしょう。福祉国家を誤解しました。福祉国家とは、行政がすべて福祉の面倒を見る。そう思ったのですよ。だから、行政が作り、行政が福祉をやる。国民は手をこまねいている。今はどうですか。権利を私どもは主張します。でも国民年金37%は未納・滞納なのです。これでは制度そのものが成り行かない。こういう現状があります。

— こういう中で、構造改革を打ち出したのは、一つは「措置から契約へ」でした。措置の頃は全て国家がやる、民間は下請けだけやっただけです。行政の言うままに、私たちには選択権がない。ただ人にお金がついてきましたから、財政的にはいささか安定をしました。それが甘えでした。行政の下請けでそのまま続いてきた。それを契約に変えようというのです。契約において官と民を対等にしようというのです。私はどうしても官というところと公というイメージがあるのです。公の支配。私ども民間はすぐ期待をする。ところが、公というのは本来パブリックという意味なのです。民間の活動があつてそれを支えるのが行政という考え方がパブリックです。それは市民から始めなければなりません。その市民が一体何をやるのか。決して難しいことではありません。戦争中、日本は弾丸を作るために鍋、釜、金属製品、全部回収しました。各家庭から出させた。この時アメリカはどうしていたか。テレビ、洗濯機、ドライアー、冷蔵庫、コカ・コーラ、インスタントコーヒー、次から次へと開発して、普及をしているのです。大きな違いを感じました。生活文化の違いです。そして市民文化の違いです。

私の妻は3年間認知症でした。車椅子に乗っていました。何処へでも連れて行きました。アメリカへも連れてきました。アメリカのビルに車椅子を押して入ってエレベーターの前に立って待っている。エレベーターが来た。いっぱい乗っているのです。とっても車椅子は入れない。もう一台待たなければと思つたら、エレベーターに乗っている人々が降りてきて、私の夫婦を優先的に入れてくれまし

た。頭が下がりました。私にはできない。でも、さりげなくするのはですね。それが、市民文化。その市民文化の上に、やはり福祉を作つていかなければならないのではないかという思いを私は強くしております。でも、希望はあるのです。

アジアの文化、アジアの仏教は小乗仏教ですけれども、いま日本の仏教も、小乗仏教と見下げないで上座部仏教と呼んで尊敬をするようになりました。寺から夜が明けると僧侶が托鉢に出ます。たくさん僧侶が町へ村へと列を作つて出て行くのです。日本では托鉢は門付けと言ひまして、托鉢僧が一軒一軒回つて布施をいただくのです。布施を頂戴すると頭を下げてお礼を言つて、時にはお経を読んでお帰りになるのです。アジア仏教、托鉢に出つた僧侶を村の人々が出て待ち受けるのです。そして、僧侶が来ると布施をする。お金は一切扱いません。食べ物です。僧侶は鉢にそれを受けて、寺に持つて帰つて食事。その時は、すでに貧しい人が寺に群がつておりまして、分かち合いながら食事をするというのがアジア仏教の慣例であります。

与える村民が僧侶の前にひざまずいて捧げるがごとくに布施をする。僧侶は立つたまま、頭を下げなければ、お礼も言わない、一言も言葉を発しない、お経も読まない。これは社会常識に反するものです。社会常識とは与えるものが、上から下に投げるのです。受けるものが跪いて貰うのです。でも、アジア仏教、与える人が跪くのです。受ける人は立つたまま。サービスの原点でしょ。こういうサービスが私共でできるかどうか。日本には日本の文化があります。皆さん方が日常でしている文化があるのです。例えば、結婚式に呼ばれるとお祝い金を持つて行きます。持ちきれない程の引き出物を頂戴して帰るのです。葬式、香典を出す。昔から半返しでしたけれども香典返し、それくらいはするのです。与えたら返してもらつたのです。これを互酬、お互いに酬い合う。互酬と言うのです。ヨーロッパには互酬ないのです。葬式、結婚式にお金を持つていく人はいないのです。日本は近代化されましたけれども、未だに互酬を私ど

もは続けております。東北の大災害の時、口蹄疫でお世話になった宮崎県が24時間ぶつ通しで支援助物資を東北へ運んでいるのです。函館、228艘の船を岩手に寄付しました。この漁船は、昭和9年の函館の大火で援助を受けたお返しです。お返しが社会化されたのです。北海道の奥尻の災害の時に一人のお婆さまが義援金を持っていらつしやいました。

「私は関東大震災で助けられました。お返しです。奥尻に送って下さい」。

2つの点に注目しました。助けられたということとを七十年間も忘れてないのです。お返しをしなければならぬ。でも、実際にお返しをする先は、助けてくれた人ではなく、見ず知らずの第三者にする。互酬というのは、「pay back」、貰ったら返す。バックする。それが社会化する。奥尻に送られたことは「pay forward」、第三者へ向けられる。そういうことです。私は、日本文化は必ずや育つと思っております。東北大震災で16歳の高校一年の男の子が、津波が来るといので逃げました。津波が引いて戻ったのです。全部、跡形もなく家が流された。しかし、一つ高い所にあつた自分の家は無傷で残ったのです。ラッキーではないですか。でも、この少年は避難所に取って返して、家を流された人々を前にして、

「申し訳ありません」。

頭を下げたのです。見事な高校生ですね。

神奈川県に私のいる横須賀と横浜と2つの刑務所があります。私は横須賀の刑務所に60年ボランティアをしてきました。今もしております。その刑務所で受刑者がテレビで災害を見たのです。家が流され、人が流され助けられない、その様子を見ました。そして自主的にお金を出し始めました。義援金です。2つの刑務所で300万円。受刑者の1か月の労賃は作業によって違いますけれど平均して3200円くらいです。多くの人が自分の収入の2か月分を義援金に出しているのです。日本には68の刑務所があります。60

00万円の義援金が集まったのです。受刑者は自分のことしか考えないです。自分の利益を得るために、他人の利益を犯してきました。その人が災害の現実を見て、初めて人の幸せを願ったのです。これが大きな私どもの希望であります。刑務所に光が差したのではなく、刑務所が私共に新しい光を照らしだしてくれました。

日本の社会、誰しもが不幸の底には人の幸せを願う心があるので。これをいかに掘り起こし、立ち活かし、そこに、私どもの出会いがあります。毎日の出会い、利用者、同僚、地域のひととたくさんの人に出会うかもしれません。出会うと挨拶をします。私は毎朝、今朝だけ休みましたけれども、40分歩いて6時半の町のラジオ体操に参加して、約30年来ですけれども毎日挨拶をしています。挨拶というのは、ただ、「おはようございます」というだけではないのです。アイヌの言葉で、イランカラブテというのです。あなたの心に触れさせてくださいという意味です。挨拶というのは、「おはようございます」を通して、心と心が触れ合うチャンスです。それが出会いなのです。アメリカの視覚障害の子どもの施設に行きました。入っていったら、玄関に大きな子どもの写真が掲げてありました。2人の幼児。一人の子がもう一人の子の肩を抱いて談笑している。話しかけている。もう一人の子がニコツと笑っている可愛らしい写真。一人が白人、一人が黒人の子でした。その下に字が書いてありました。

「The blind are also colorblind」

目の見えない子は、視覚障害を持っている子は、colorの判別ができない。赤か黒か緑かわからない。当然でしょう。ハツとしたのは「color」。アメリカでcolorというとき原色をさすと同時に皮膚の色を指すのです。白いか、黄色いか、黒いかです。中でも黒い人をカラード、色のついた人と差別をしてきました。そうすると、目の見えない子どもは、相手が誰であるか区別がつかない白人であろうと黒人であろうと肩を抱いて二人でニコリ笑って見られるというふうだと理解をしました。私は目が見えます。目が見

えると、つい相手が誰であるか気になるのです。時には一歩も足が出ない、時には人種差別。心が暗いです。目の見えない子は、目は見えなくても人に対して心を開けているのです。

出会いというのは、私のように目は見えても心の眼が閉ざされている者と、目は見えなくても心が開いている者とは、出会い出会う互いの魂を開き合う。それが出会いです。そういう出会いを是非皆さん、毎日経験をして欲しいと願います。

ヘレンケラーはこう言ったのです。「月を見て未来への夢を描けない人は惨めだ」。ヘレンケラーは月を見たことがないので。その月を見たことのないヘレンケラーが月を見て未来の夢を描きなさいという。

上を仰いで、他人とともに学び合い、支え合いながら、一足々々お互いに歩いていきたいものだと思います。

